俺と言う名のサイヤ人　リメイク

厄丸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある宇宙に惑星があった、しかしその惑星は宇宙の帝王に破壊されてしまう。

なんとか爆発する前に宇宙の帝王に戦いを挑むが無惨にも敗北をしてしまった。

ここで死んでしまうのか?と思いきやなんと巨大な力のぶつかり合いにより発生した巨大な時空の穴に吸い込まれ、次元をを飛び越えてしまい周りを見れば自分がいた場所とは違うのは明白。

そこで先程まであやしていたはずの赤ん坊、好青年となった孫悟空と出会う。

そして青年は心に違う、親友を殺された恨みを糧にして・・・

「俺はフリーザを許さねぇ・・・バーダックの敵を取るまで俺は死ぬわけにはいかないんだッ!!!」

目次

ドラゴンボールＺ　時を越えた復讐のサイヤ人 ―― 1
第１話　時を渡ったサイヤ人 ―― 6
第２話　家族会議勃発！武道に進むか学者になるか？ ―― 10
第３話　事実発覚！え、悟空の兄ちゃん？ ―― 14
第４話　強大無慈悲、戦闘民族サイヤ人 ―― 21

ドラゴンボールＺ　時を越えた復讐のサイヤ人

オギュア！オギャア！と泣く声が聞こえる。
「やっぱり戦闘力は低いな」
「まぁ下級戦士の子だ、仕方があるまい」
２人の異形系宇宙人がそう呟く、下級戦士とはサイヤ人のおける位のことを指す。
下級戦士、中級戦士、上級戦士と階級が別れており上級戦士は超エリートと言われるほど強力な戦闘力を有している。
「お、バーダックの子供はこの子か」
一人の青年が部屋に入ってくる、どうやらその青年もサイヤ人でずっと泣きわめいていた子供をそっと抱き上げてよしよしと慰めている。
「全く、ギネさんのこともあるのにバーダックやつ本当に自分の息子に興味がねぇな」
「仕方がないだろうラカノン、お前やギネの様に戦闘意欲が少ないサイヤ人の少ないからな。むしろバーダックはサイヤ人としては普通だ」
「だよなぁ、ただ勘違いすんなよ？俺は戦闘意欲が無いんじゃなくて基本どこにも制圧しに行かせてくれねぇんだ、むしろ戦いたくてウズウズしているぐらいだぜ」
そんなことを話していると全身がボロボロになり血だらけとなったサイヤ人の運ばれてきた
「おっと、また派手にやられたなバーダック。しかも気絶している状態で運ばれてくるなんて珍しい」
「だろ？油断しててカナッサ星人から一撃食らっちまってよ、おかげでこのザマだ」
バーダックチームの副リーダー、トーマがそう呟く。
「まぁこんな状態じゃ次の星の制圧にはいけないな。それにフリーザ様に次の星の制圧を命令されちまってもういかないといけないんだが・・・」

「いいんじゃねぇか?あ、だったら俺を連れてってくれよ!全然制圧に行けなくてマジでつまんねんだよ!」
「あんたは出撃命令出ていないだろう?戦闘力は確かに大したもんだがそれで連れてったらアタシ達が大目玉くらっちまうよ」
「ちぇ、本当の事だからなんも返せねぇ・・・」
　ラカノンは口を尖らせて拗ねる、そんな事を話していいるうちにカカロット。のちの孫悟空は落ち着いたのか寝息をたてて眠ってしまった。
「カカロットも本当に元気に泣くな、隣の子も釣られて泣きそうになっちまってるじゃねぇか」
　ブロリーと書かれたサイヤ人はカカロットと同じ日に生まれた子である。
　カカロットがあまりにも泣くもので釣られて泣きそうになっていたがラカノンが抱き上げて落ち着かせたので泣くことなく穏やかに眠っている。
「さて、俺ももう行かないとな。ギネさんにこの事を報告しにいかないと」
「あぁ、じゃあなラカノン」
　そういってラカノンは部屋を出ていく、もちろんカカロットはもう泣き止んでいるので安心して部屋を出ることが出来た。
「本当に勿体ない、戦闘力だけなら決して弱くはないんだが何故出撃命令が降りないんだろうな」
「まぁあの性格だからな、きっと戦闘には向かないと判断されているんだろう」
　そんなことはいざ知らずラカノンはサイヤ人の集落へと戻っていく。そして同刻でカカロットが我らが星、地球へと飛ばされる準備がされていた。
「お、パラガスのおっさん。どうしたんだそんなに急いで」
「おぉ!ラカノンではないか!今しがた私の息子も生まれたと報告があってな!様子を見に行くしかない!」
「まぁおっさんも嫁さん死んじまって大変だよな、せっかくの息子何

だから大切にしろよ?」
「大丈夫だ、私はブロリーの事を決して見捨てたりしない、それでは先を急ぐのでな!」
　パラガスは急いで飛んでいってしまった、その後ろ姿を見てラカノンは笑いながら集落へと戻る
「ただいまギネさん、カカロットは可愛かったぜ!」
「本当かい?!ほら、バーダックはあんな男だから・・・悪い奴ではないんだけどあの性格だからね」
「まぁバーダックはなぁ・・・だから俺が見に行ったんだよ」
　そんな他愛もない話をしながら時間は過ぎていく、そして少したったのちに飛んでいったアタックボールが戻ってきたのが確認できた。
「ん?あれはさっき飛んでいったアタックボール・・・ちょっと行ってくるよ」
「そうみたいだね・・・気を付けて行ってくるんだよラカノン」
　気合いをためて一気にアタックボールの落ちた場所へと降り立つ、するとそこには先程とはは比にならないほど血だらけとなったバーダックが降りてきた
「はぁ?!おいバーダックどうしたんだよ!」
「ら、ラカノンか・・・い、急いでサイヤ人全員に伝えてくれ・・・!」
　ーフリーザがサイヤ人を皆殺しにしようとしているーーー

「くそ、誰も信じやがらねぇ・・・!」
「いきなり信じろって言う方が無理だろ、しかしフリーザがねぇ・・・」

正直信じがたいことだがこんなにもボロボロなバーダックを見ると嘘とも言えない、そうこう話していると遥か彼方、遠くの空の方でとてつもなく大きな宇宙船が浮いていいるのが黙視できてしまった。
「チッ・・・もうフリーザの野郎がきやがった・・・！」
「あぁ、どうやら本当のことらしいな・・・！」
「ちくしょう・・・ッ！フリィイイイイイザァアアアアアアッ!!!!!」
「ちょ、待てよバーダック！行くしかねぇか・・・！」
二人は宇宙船目掛けて飛んでいく、あと少しというところで宇宙船から大量のフリーザの部下が降りてくる
「マジの本当のことかよ！じゃあ抵抗させてもうらぜ!!!」
部下を殴り、蹴り、スピードを落とさずに宇宙船へと一直線に飛んでいく
「フリーザァ！出てきやがれぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!」
バーダックが大量の兵士どもに引っ付かれて大声をあげる
「俺は貴様を許せねぇぇぇぇぇぇ!!!!」
「おーらよっと!!!バーダックにいつまでも引っ付いてんじゃねぇよ！」
くっついていた兵士をエネルギー波やエルボーでなぎ倒していく、するとバーダックの声に反応してなのか宇宙船からポッドに乗った異形の宇宙人、フリーザがにやにやしながら出てくる
「これで・・・全てが変わる・・・！」
「バーダック・・・？」
「この惑星ベジータの運命・・・」
手に大きなエネルギーの玉を作り出す
「この俺達の運命・・・」
更に密度が増してギュルギュルと大きな音が鳴り響く
「カカロットの運命・・・そしてーーー」
一気に質量がが増してそのエネルギー弾は輝きを増す
「貴様の運命もッ!!!」
「合わせるぞ！バーダックッ!!!」
ラカノンも両手にエネルギーを貯めて前に突き出す

「「これで最後だぁあああああああッ!!!!」」
　ラカノンとバーダックの合わさったエネルギー波は巨大なパワーとなってフリーザへと飛んでいく、しかしーーー
「ふふふ・・・ホーッホッホッホッ!!!」
「ん、なに・・・?!
「クソが・・・まさかフリーザの野郎これ程までに・・・ッ!
　なんとフリーザが作った巨大な光球が2人の放ったエネルギー波をかきけしてしまった!
「へへっ・・・カカロットよぉおおおおおおおおおおお!!!!!」
「くそ、こんなところで・・・っ!!!!」
　ラカノンとバーダックが巨大なエネルギー弾に飲み込まれてしまう、このままでは本当に死んでしまう、と思った矢先にーーー
「な、なんだこの黒いのは?!」
「ば、バーダック?!う、うわぁあああああああ!!!!」
　なんと後ろに発生した黒い渦の中に2人とも巻き込まれてしまう、しばらくたっただろうか?ラカノンの肩を優しくたたく影がうっすらと見える
「うぅ・・・バー・・・ダック・・・?」
「ばーだっく?もしかしてオラの事誰かと勘違いしてんのか?」
　山吹色の胴着に身を包み特徴的な髪型の青年がそこに篭をしょって立っていた
「あ、あんたは・・・?」
「オラか?オラの名前は悟空!孫悟空だ!」
　これがラカノンの物語、そしてバーダックの敵、フリーザを倒すまでの物語であるーーー

第1話　時を渡ったサイヤ人

「へぇ～、ラカノンはサイヤ人ちゅうんか。んでオラはそのバーダックってやつの息子って訳か・・・」
「悟空さにもおっとうは居ると思ってはいただが・・・それがまさか宇宙人だなんてなぁ」
「俺も正直驚いている、まさかバーダックの倅であるカカロットが俺と同じくらいの歳でこうして話しているんだからな。しかもさっき地球に送ったばっかだんたんだが・・・」
　ラカノンは驚きを隠せない。さっき送ったばっかのカカロット、孫悟空がまさか自分と同じくらいの歳でしかも結婚までしているではないか。
「もしかしてカカロット、お前小さい頃に頭でも打ったか？」
「あ～、悪いんだけどそのカカロットってのやめてくんねぇかな？オラは地球で育ったかんな、孫悟空っていう名前があるからそっちで呼んでほしい」
「あぁすまん、確かにカカロットって呼ぶのもあれだな。悪かったよ悟空」
「気にすんな！それにオラが宇宙人って知れたのもラカノンのおかげだかんな。良かったらでいいんだけどラカノンの話も聞かせてくんねぇか？」
「確かに！オラも気になるべラカノンさん！」
　それを聞いてラカノンはポツリポツリと話始める。
　サイヤ人の事、惑星ベジータの事、バーダックの事、そして宇宙の帝王フリーザの事・・・自分が住んでいたサイヤ人の集落の事や悟空の母親の事。
　自分の故郷の事を話していたラカノンはとても楽しそうであった。
「星1つを片手で滅ぼしてしまうなんて・・・」
「フリーザか・・・そいつがオラ達サイヤ人の惑星を滅ぼしちまったんだな」
「あぁ、俺は直前で気づけたがどうやらバーダックはもう少し前に気

づいていたらしい。どうやって知ったのかは知らないがボロボロになったバーダックの後を追って俺たちはフリーザに殺されてしまったはずなんんだ」
　悟空とチチは少し考え込んでしまう、少々現実味がないということも事実だが嘘を言っているようにも見えない。しかしラカノンが自分達には理解が出来ないほど悲しみに包まれていることは察することは感じとれた。
「確かに信じられないかもしれない、けどこれは事実なんだ・・・」
「ラカノンさん・・・」
「ん～・・・」
　悟空は更に考えている、しかし決意をしたように立ってラカノンにあることを持ちかける。
「ラカノン！オラと一緒にフリーザって奴を倒そうぜ！」
「え？悟空・・・と？」
「な、何言っているだ悟空さ！ピッコロ大魔王も倒してやっと地球に平和が訪れたんだぞ?!」
　チチは悟空が言ったことに対してかなり否定的となっている、しかし悟空の決心は揺るがない。慌てているチチは宥めて真っ直ぐにラカノンの事を見てハッキリと告げる。
「だってよぉチチ、ラカノンの話を聞いてオラ思っちまったんだ。世の中には、宇宙にはもっと強え奴がいるって！」
　悟空は目をキラキラさせながら話を続ける。
「確かにフリーザは相当強えんだと思う、それこそオラが考え付かない程に。気を感じ取って分かった、ラカノンは今のオラよりずっと強え。そのラカノンが、オラの父ちゃんが手も足も出なかった。オラはそいつと戦ってみてぇ」
「「悟空（さ）・・・」」
「けど今のオラじゃ手も足も出ねぇで殺されちまうんだと思う。だったらオラとラカノンで一緒に鍛えるってのはいい考えじゃねぇか？」
　きっと悟空は純粋にそう思っているのだろう、そして自分はピッコロ大魔王が復活したときに親友を殺されてしまった。手も足も出ず

に自分もピッコロ大魔王の配下に殺されかけた、敵を射ちたいのに力不足で何もできなかった気持ちは自分も痛いほど分かる。だからこそラカノンの力になりたいと思った。
「オラも昔に親友を殺されちまったことがあってよ、そのときなにも出来なかったんだ。だからラカノンの気持ちは分かる、オラはラカノンの力になりてぇ！」
「悟空・・・お前って奴は・・・！」
「だからよ、チチ。すまねぇと思っている、だけどラカノンの力になるのはダメか・・・？」
　チチは悩んでしまう、悟空の過去はある程度聞いてはいたが親友であるクリリンが殺されてしまった時は本当に悲しそうにしていた。あの時の夫の顔はきっと忘れることは出来ないだろう。
「いや、いいんだ悟空。ここでお前の考えに乗ってしまうとお前にもチチさんにも迷惑が掛かってしまう。それに俺はこの星の人間じゃないからな、同じサイヤ人の同胞とはいえ申し訳ないよ」
「あ・・・」
　自分が悩んでいる間にラカノンは行ってしまう、ここで彼を止めなければきっと、二度と会うことは出来なくなるだろう。そう直感することが出来てしまった。
「待つだラカノンさん！」
「どうしたんだ？チチさん」
　チチは意を決して話始める。
「正直オラはもう悟空さに死んでしまうような事はしてほしくねぇ」
「チチ・・・」
「だけんど！折角悟空さと同じ人間と会うことが出来たんだぞ？しかも故郷の惑星は消滅して同じ人間と会うのも出来ねぇかもしんねぇんだぞ?!」
「チチさん・・・」
「オラはそんな薄情な人間じゃねぇ、だから一緒にフリーザをぶっ飛ばすだぞ!!!」
　チチはニコっと笑って二人を見る。そんなチチの姿を見てラカノ

ンと悟空はほっと胸を撫で下ろす。
「そっか・・・そうだよな！俺と悟空は数少ない同じサイヤ人だもんな!!!」
「そうだぞラカノン！オラとラカノンは同じサイヤ人だ！」
「うんうん！男は元気なくらいが一番だ!!!」
「よーし見てろよフリーザの野郎!!!」
「オラ達でぜってぇぶっ倒してやるかんな!!!」
２人のサイヤ人は改めて決意を固める、１人は敵を射つ、もう１人は自分の友人を助けるために。絶対に勝つと気合いを高めて鍛え始めることにした

第2話　家族会議勃発！武道に進むか学者になるか？

「よし、こんなもんでいいだろ！そっちはどうだ？ラカノン」
「おう、中々いい感じだぜ、しかし驚いたな・・・」
　野菜に手を掲げながらラカノンは呟く。
「まさか気を操るのに最適な修行が野菜に気を送ることだなんてな。確かに細かい気のコントロールにはうってつけかもしれん」
「だろ？神様の神殿にいるときもこの修行をしてよ、結構ちゃんとした修行なんだぜ？」
「あぁ、これなら俺も気を読むっていうことが出来るようになるかもしれない。ただ野菜の気を読み取って送らないと元気すぎて爆発するのはやばいだろ、めっちゃ驚いたわ」
　ラカノン達は修行をしつつ農作業をしている。
　サイヤ人達は大食いのため基本食料が足りなくなってしまいがちだ。だからこそこうして自分達で食料を育てられるのは自給自足にも繋がり細かい気のコントロールも出来るようになる。
「気がちゃんと使えるようになれば俺の技の威力もアップするはずだ、その為には毎日コツコツと修行をしておかないとな」
「おう！オラに武術を教えてくれたじっちゃんがいんだけんどよ、じっちゃんも同じようなこと言っていた！」
「いいこと言うじいさんだな、俺もその内会ってみたいぜ」
　そんなことを話ながら修行兼農作業を淡々と進めいていく。辺り一面がツヤツヤと輝く野菜で一杯になった頃、悟空の家の方から可愛らしい子供がトテトテと走ってきた。
「お父さ～ん！ラカノン兄ちゃ～ん！お母さんがご飯だって～！」
「おう！ありがとうな悟飯！」
「まったく、兄ちゃんは止めてくれよ。俺父ちゃんとほぼ同じ歳なんだぜ？」
　悟飯が「え、じゃあおじさんの方がいい？」と首を傾げると「いや、

だったら兄ちゃんでいいや・・・」と項垂れてしまうのだった。
「さ、みんな席についただな？腹一杯食ってけろ！」
「サンキューチチ！いただきまーす！」
「毎日すまねぇなチチさん、居候の俺の分まで準備してもらって」
「何言ってるだ！ラカノンさんはもう家族みてえなもんだべ。ささ、冷めねぇうちに食ってけろ！」
　チチにそう言われラカノンは橋を伸ばす、やはり美味いと思いながら孫一家は食事を楽しむのであった。
「みんな食い終わっただな？悟飯ちゃん部屋に戻ってお勉強だべ！」
「ねぇお母さん。僕もお父さんやラカノン兄ちゃんみたいに修行？をしてみたいんだけど・・・」
「悟飯ちゃんはダメだ！将来は立派な学者さんになってもらわねぇと！」
「なぁチチぃ、悟飯もこう言っているし一緒に修行すんのはダメか～？」
「ダメだべ!!!」
　この光景もラカノンからしたら見慣れたものだろう、自分に学はないがチチの言っていることも理解はできる。しかし頭ごなしに上から言い続けるものどうかと思い少し助け船を出すことにした。
「だったら修行しつつ勉強するんじゃダメなのか？」
「修行なんて危ないことを悟飯ちゃんにやらせるわけにはいかないべ！」
「けどその修行って悟飯がやりたいことなんじゃないのか？それを考えも聞かずに頭ごなしに否定しつつけてしまうといくらいい子な悟飯でもグレちまうと思うぜ」
　それを聞いてチチは唸ってしまう、ラカノンに言われたことも事実だが自分の可愛い息子を危ない目に会わせたくないとも思っている。
「悟飯はなんで修行をしたいと思ったんだ？」
　ラカノンは悟飯に問いかけてみる、すると悟飯は少し申し訳なさそうに話始めた。
「だってお父さんとラカノン兄ちゃんはフリーザっていう悪い人を倒

すために修行しているって聞いたから・・・」
「もしかして俺達の為に鍛えようとしていたのか・・・!?」
「悟飯ちゃん・・・」
「・・・」
　悟飯の言おうとしている事は感じ取れた、しかし悟飯はまだ3才。鍛え始めていいものなのか・・・と夫婦二人で悩んでいるとラカノンが提案を出した。
「別に3才でも戦えれば問題はなかったな、俺たちサイヤ人の話だが動けるようになったら既に戦っていた者は多い。バーダックやサイヤ人の王子も動けるようになってからすぐに戦い出ていた。」
「それを聞くと言いかもしんねぇが・・・うーん・・・」
「けど悟飯に任せればいいんじゃねぇか?オラとしては悟飯の考えを優先したいんだけんど・・・」
「僕は・・・」
　悟飯はかなり悩んでいる、正直なところ自分も危険な目に会わせることは気が引ける。しかし悟飯のやりたいことを尊重したいのもまた事実だ。
「お母さん・・・僕やっぱり鍛えたいよ!ちゃんと勉強もするから・・・!」
「・・・」
「チチさん、俺からも頼むよ。悟飯がこんなに頼むなんて珍しいしもしこのまま鍛えなかったとしても一緒にフリーザの所まで付いて来ちまいそうだ」
「オラからも頼む・・・」
「お前は父親なんだからもっとシャッキリしろ!じゃねぇと許可されるものもされないだろ!」
　よほどチチに頭が上がらないのか珍しく元気がないように見える。それをラカノンが喝を入れている姿を見てチチはため息をつく。
「はぁ・・・分かっただ。オラだって悟飯ちゃんを死なせたくねぇし悟空さの元気のない姿はみたくねぇ」
「チチぃ・・・!」

「そんかわり!!!誰にも負けないぐらい強くなるだぞ!それが悟飯ちゃんが修行をする条件だべ」
「いいの?!お母さん!!!」
「すまないなチチさん、俺達で悟飯を誰にも負けないぐらい強くしてみせるぜ」
「いいんだべ、悟飯ちゃんがこんなにオラに頼むのも珍しいからな。だったらそれを尊重するのが親というもんだべ」
家族会議が終了してさっそく悟飯の修行メニューを2人で考え始める。走り込みや筋トレ、野菜作りなどを考えながらその日はゆっくり休むことにしたのだった。

第3話　事実発覚!・え、悟空の兄ちゃん?

悟飯のメニューを考えて数年後、ラカノン、悟空、悟飯はカメハウスへと向かっていた。

「そろそろか、カメハウスに向かうのも俺は久しぶりだな」

「仕方ねぇさ、ラカノンは修行で忙しかったし悟飯の面倒も見てたんだ。けどじっちゃんきっと喜ぶぞ!」

「そうだね!・お父さんとラカノン兄ちゃんが育てた野菜いつも美味しいって言ってるよ!」

ラカノンは武空術で、悟空と悟飯は筋斗雲に乗って空を飛んでいる。向かっている理由は野菜を届けるためなのとご近所付き合い、ようは最近の報告をするため向かっている。

「そろそろだな・・・ん?」

「どうしたラカノン?」

「いや、多分俺の気のせいだろう・・・」

(どういうことだ・・・?・宇宙から悟空と同じくらいの戦闘力を感じる。俺には及ばないがそれでもかなりの強さを持っていやがるな・・・)

ラカノンはかなり大きな気を感じ取った、しかし宇宙から来るということは基本的には良いことではない。それこそ自分が居たフリーザ軍がやるようなことだろう。

(まさかな・・・)

「悟空、空の方にちょっと意識を向けてくれないか？」
「え？いいけんど・・・でけぇ気を感じるな。とびっきり悪い気ってわけじゃねぇがいい気ではないことは確かだ」
「あぁ、一応気を付けてくれ」
「え？どうしたの？僕には分からないや・・・」
「悟飯はしょうがないさ、最近になってやっと気を感じ取れるようになったしな」
　そんな会話をしながら俺達はカメハウスへと飛んでいく。しばらく飛んだ後だろうか、海の向こう側、小さな島にポツンと佇んでいる小さな家が見えてきた。
「あ、やっと見えてきたな。ここまで以外と遠いからいい修行になるぜ」
「僕は筋斗雲に乗りながらになっちゃった・・・」
「おーいじっちゃ～ん！元気だったかぁ～!!!」
　ラカノン達3人がその島へと到着する、するとカメハウスの中から何人か人影が出てきた。
「おぉ、久しぶりじゃな悟空、ラカノン。元気じゃったか？」
「本当に久しぶりだな悟空！最近だとラカノンが来ていたから会えなくて結構寂しかったんだぜ？」

「ははは、オラも嫁さん貰ったかんな。それにラカノンが修行だからっていつも運んでくれんだ」

「ここまで来るの中々時間かかるからな、いいトレーニングになるんだよ。ただちっとばかし重力が軽くて動きにくいけどな」

そんなことを話ながら時間は経っていく、するとブルマがあることに気づいて悟飯の頭に指を指す。

「あら！ドラゴンボールじゃない！しかも四星玉！」

「あぁ、なんせじっちゃんの形見だかんな。オラの息子の名前も悟飯だしきっとお守りになってくれるっと思ってよ」

「なるほどな、自分のじいさんの名前をつけたのか。悟空にしてはいいセンスしてるじゃないか！」

「おいおいよしてくれよクリリン～」

「じゃが悟飯のやつもきっと守ってくれよう。なにせワシの一番弟子じゃからな！」

ドラゴンボールや祖父悟飯の話をして更に盛り上がっていく。しかしその楽しい時間をかき消すような轟音と共に何かが近づいて来ているのが分かってしまった。

「おい悟空、こいつはさっき宇宙の方から感じ取った気だよな？」

〔あぁ、間違いねぇ。こっちに物凄いスピードで近づいてんな」

「お父さん・・・僕なんだか怖くなってきた・・・」

「確かにこいつはすげぇ気だな・・・俺じゃ勝てない・・・

時間にして10数秒、もしかしたら数秒だったかもしれない。ラカノン達が感じ取った気の正体が目の前に降り立つ。

「久しいなぁ、カカロットよ・・・！」

砂煙で姿がよく見えない、しかしその声を聞いて真っ先に反応するものが居た。

「ん・・・？ラディッツ・・・？」

「は、え、もしやその声は・・・ラカノンさん??!!!」

「ラカノン知り合いか？」

「いや、知り合いも何も悟空、お前の兄ちゃんだぞ？」

「え・・・オラの・・・兄ちゃん??!!!」

「「えええええええええ???!!!!」」

「やっと質問攻めが終わったか・・・」

落ち着きを取り戻すまで時間経過

「すまねぇなラディッツ、いや、今はお前の方が年上だから敬語の方がいいか？」

「勘弁してくださいよラカノンさん・・・」

「いやちょっと待ちなさいよ！何であの２人はあそこまで馴染んでいるわけ?!」

「どうやら前話した惑星ベジータ出身らしくオラが赤ん坊の時からの知り合いらしい」

「そのわりにはラディッツさんの方が年が上に見えるがのう・・・」

「そりゃ俺はこの時代の人間じゃないからな。さっきも話した通り変な空間に巻き込まれて俺はここにいる」

ラディッツは疲れた顔をしている。それもそうだろう、目の前には自分の死んだと思っていた師匠がいて弟と同じぐらいの年とくれば驚かないはずがない。

「にしても何故この星に来たんだ？それに俺はてっきりサイヤ人は全滅したもんだと思っていたんだが・・・」

「サイヤ人は数人ですが生き残っています、今生きているサイヤ人だと俺、カカロット、ラカノンさん、ベジータ、ナッパぐらいだと思います」

「以外と生き残ってんな、それでこの星に来た理由は？」

「ええ、今俺たちはフリーザの元で星の地上げをしています。この星

に来たのはカカロットがこの星に飛ばされたのを思い出して迎えに来たっていうわけですね」

なるほどな、とラカノンは頷く。しかしカカロット、もとい悟空は地上げをするような性格ではなく誘っても無駄なんじゃないか？と思う。

「だがよぉ兄ちゃん、オラは地上げ？っていうのやるつもりはねぇぞ？」

「それについては俺が迎えに来たのはフリーザを倒す為に少しでも頭数を揃えようというのが王子、ベジータの考えだ」

「なるほどな、確かにフリーザを倒すってんなら俺も同意だ。しかし地球は重力が軽いからな・・・もっと重い場所で鍛えることができるならいいんだがな」

ラカノンが言っている通り地球の重力はとても軽い、といってもそこに住んでいる地球人達からすれば通常通りのものなのだが。

「そのためにも俺たちはフリーザ軍に入って反発する機会を伺っているんです」

「くっそ～、俺も宇宙に出られたらいいんだが・・・」

ラカノンはちらっと悟飯の方を見る、まだまだ小さい弟のような悟飯を置いていくわけにもいかないし悟空達夫婦には恩もある。そのこともあり今宇宙に行くわけにはいかなかった。

「しかしラカノンさんもいるのは心強い！見たところ最後に会った時と戦闘力は変わってなさそうですがヒシヒシとその強さは肌で感じ

ますよ」

「あたりめぇだろ兄ちゃん！ラカノンは本当にすげぇやつなんだぜ！」

「よせやい、俺はバーダックにも及ばない戦闘力だぞ？今だっていいとこ５０００だ」

わいわいと話しているところにあまりにも邪悪な気が現れる、しかしその早すぎる出現と消滅にラカノン達が気づくことはできなかった。

「うぐぁッ!!!?」

「ん？どうしたラディッツ、腹でも痛くなったか」

「離れろクリリンッ！でえりゃあッ！」

ラカノンがラディッツを蹴り飛ばす、しかし吹っ飛んだラディッツには傷一つ付いておらず真っ黒な気を暴風のように吹き荒らしながらカメハウスの前に降り立つのだった。

第４話　強大無慈悲、戦闘民族サイヤ人

ラカノンｓｉｄｅ―ｓｔａｒｔ

「おいおい、なんだこのラディッツの気は…ッ！」
「あぁ、禍々しいなんてもんじゃねぇぞ…！」
　今のラディッツは正しく悪の戦闘民族といっても差し支えない程の気を纏っているだろう、しかし何故だ…？いきなり戦闘力が跳ね上がるのは変身タイプであり得ることだがラディッツはサイヤ人、大猿にもならずにこれほど強くなることはあり得ないはずだ。
「ハハハッ…！最高の気分だ!!!ラカノンさん…いやラカノン！そしてカカロットよ！俺たちと共に来るのだ!!!」
「は、馬鹿言っちゃいけぇなラディッツ。少なくとも俺は今宇宙に出るつもりはないといったはずだが？」
　とは言ってもこの威圧感…間違いない、今のラディッツは俺より強いだろうな…だが！
「今のお前には何を言っても無駄のようだな！どうしてもってなら俺を倒してみろ！」
「調子に乗るなよ？今の俺には貴様なんぞ簡単に捻りつぶせるほどの力があるのだ!!!」
　その言葉を最後に乾いた音が一面に広がる、ラカノンとラディッツが拳を打ち付けながら高速移動をしている証拠だ。
「チッ！まさかここまでとはな！」
「まさかその程度じゃなかろうな！だとしたらがっかりしたぞ!!!」
「なに――――！」
　ラディッツの鋭い一撃が顔へと入る、思わず顔をしかめる程の強力な一撃だがこの程度ならまだ平気なレベルと言えよう。
「なんだと?!」
「甘いな！」
　顔に刺さったままの腕をそのまま掴み一本背負いの要領で地面へと叩きつける、そのまま腹に一撃を入れようとしたがエネルギー破を

撃つことで無理矢理俺から距離を取った。
その勢いを利用してエネルギー弾を無数にぶつけてくる。
「どうだ！」
しかしラディッツとラカノンには決定的な違いがある、それは地球に来たことで
身に着けた技術。
「相手の位置も感じ取れないのに見失うことをするのは関心しないな!!!」
蹴った時にスカウターを壊しといて正解だったな。
しかしラディッツの方が強いのは客観的に見ても間違いはない、さて、どうするべきか…

ラカノンｓｉｄｅ—ｆａｄｅｏｕｔ

孫悟空ｓｉｄｅ—ｓｔａｒｔ

「ちょっと！ラカノン君やるじゃない！」
ブルマがオラ達の横でそう言っている、だけど実際はそうじゃねぇ…
「なぁ、じっちゃん、クリリン」
「ふむ、このままだとラカノンは勝てないじゃろうな……」
「なんでよ！見た感じだとラカノン君が勝ちそうじゃない！」
「違うんすよブルマさん…ラカノンはラディッツに止めと言える一撃を入れる隙を作ることができないんです」
まさにクリリンが言ったことだ、力に差があると相手を倒すにはある程度の気を溜めねぇとダメージを与えることは出来ねぇ。
中途半端に溜めたんじゃ相手にダメージを与えるどころか弾かれちまう。
「そんな！どうにかならないの?!」
「今のところラカノンが互角に戦えているのは気で相手の位置を掴めるからといっても過言ではないじゃろう。なんとか出来るとした

ら・・・」
　じっちゃんがオラの方をちらりと見てくる、やっぱそうだよな…オラもそうするしかねぇと思っていたところだ。
「あぁ、オラも一緒に戦う」
「お、おい！無茶だ悟空！」
「じゃがこのままでは…」
「そうだぞクリリン、その無茶をラカノンはしてんだ。オラにはこのまま友達を見捨てることは出来ねぇ」
　ラカノンと兄ちゃんの戦いには隙がない、だけんどぜってぇに戦闘に入る隙ができるはずだ。
　オラはそう思いながら臨戦態勢を取る、少しだけ耐えてくれラカノン、すぐにオラも加勢すんぞ！

孫悟空ｓｉｄｅ　ｆａｄｅｏｕｔ

???ｓｉｄｅ―ｓｔａｒｔ

『スピードが落ちてきたなぁ！貴様の死もすぐそこまで迫っているぞ！』
『ゴチャゴチャとうるせえ奴だ！変な力で一気に強化されたてめぇに負けてたまるか！』
「不味い！ラカノンさんとラディッツさんにスタミナの差が出始めてきてしまった！」
　しかしどうするべきだ…？ラカノンさんがいる時代には何故か干渉できないから助けに行くことができない・・・幸いにもラカノンさんが強くなったおかげでまだ何とかなってるけどこのままじゃ…！
「大丈夫よ○○○○○、どうやらラカノン君が思ったより強いみたい。おそらく大幅に歴史を変えられないのは向こうも同じよ」
　後ろから○○○○○様の声が聞こえる、しかしこのままだとラカノンさんがラディッツさんにやられてしまうのは間違いないだろう。
「それに悟空君が一緒に戦うみたいだからおそらくこのまま勝つこと

は出来るでしょう、私たちが助けに行くことは出来ないけど最悪私の力を使って無理矢理突破することは出来るわ」
「しかしそれではあなたが…！」
「平気平気！ここで仕事をしなかったら○○○○○の名前が廃れるってものよ！それに使うのは最終手段よ、ラカノン君と悟空君なら大丈夫！二人を信じなさい！」
俺はそういわれて目線を戻す、確かに悟空さんが加わって形勢はほぼ互角、これならいけるだろう。
そう思いながらも心配は拭えない、もし本当にもしもの時があればその時は俺が…！

???
？side—fadeout

ラカノンside—start

「どうしたカカロットよ！まさかその程度とは言わんだろうな！」
「くっそ～！確かに今の兄ちゃんすげぇ強えぞ!!」
「喜んでいる場合か！殺す気で行かないと俺らが殺されちまうぞ！」
マジでこいつ一気に強くなりすぎだろ！悟空が加わってくれたからまだしもこの戦況は劇的に変わったとはいえねぇ…！
こうなったらリスクはあるがやるしかねぇな!!
「悟空！頼みがある！」
このままだとラディッツに作戦が伝わってしまうため一度大きな爆風を生み出す、煙であいつは俺らのことが感知できないはずだ。この隙に…！
「いいか悟空、俺は今から気を溜めてあいつを気絶させる。出来ることならあいつの動きを止めてほしい」
「あぁ、それはいいんだけんど今の兄ちゃんを止めるのかなり厳しいぞ…？」
「大丈夫だ、あいつはおそらく尻尾を鍛えていない。なら握ることさえできれば動きを止めることは出来ると思う」

戦い方を見ている限り絶対に後ろを取られないように動いている、それほどまでにあいつは後ろを取られたくないってことだ。
「正直かなり危険な賭けになるだろう、もしかしたら死ぬかもしれない」
「でぇじょぶだ！もし死んだとしてもドラゴンボールがあれば生きけぇることができる。だからぜってぇ成功してくれよな、ラカノン！」
やれやれ、こいつは本当にお人よしだな。だが嫌いじゃない、むしろ大好きな部類だ！
「あぁ！任せたぞ、悟空!!!」
そうして俺は気を溜め始めた。気絶をさせるだけだ、そこまで時間はかからないだろう。

ラカノンｓｉｄｅ—ｆａｄｅｏｕｔ

悟空ｓｉｄｅ—ｓｔａｒｔ

とは言ったものの……
「おいカカロットよ、なんだこの軟弱な拳は！その程度ではこの兄は倒せんぞ!!!」
「流石だ、確かに今のオラだと勝つことはできねぇな…だけんどそれが諦める理由にはならねぇぞ!!!」
拳を何度もぶつけては弾かれれるのを繰り返す。
腕が痺れ、感覚もどんどん無くなってくるのを感じながらオラも隙を作る技の準備を始める。
「そろそろ飽きてきたなぁカカロットよ！しかし弱い者いじめをしても面白くはない、これで終わらせてやる！」
そういって兄ちゃんは両手にエネルギーを溜め始める、あれを受け止めるのは無理だな。けどその油断はよくないぜ兄ちゃん!!!
「天津飯！技を借りるぞ！」
両手に気を溜めてそれを光として放つ、隙を作るならこの技は優秀

だからな!!
「太陽拳ッ!!!」
「なんだとッ!!!な、なにも見えん!!!」
気が読めねぇなら目潰しは有効だ！この隙に！
「へへへ……掴んだぞ！」
「ぬぅ……！しまった……！」
「ナイスだ悟空、おかげで十分な量の気を溜めることが出来た」
尻尾を掴まれた兄ちゃんは膝から崩れ落ちる、尻尾を鍛えていなきゃこうなっちまうからな。今はないけどオラも鍛えておいてよかった。
「殺しはしないが、虫の息レベルまでにはさせてもらうぞラディッツ」
「くそ……まさかこの俺がぁ……!!!」
そうしてラカノンは兄ちゃんの頭に気を溜めた拳を思いっきり振り下ろした。
ドゴンッ!!!と地面に頭がめり込むほどの威力で兄ちゃんの意識を刈り取るには十分な威力だったのが目に見えて分かる。
「こりゃあ痛いじゃすまねぇな……」
「しょうがないだろう、意識を刈り取る方法を取らなきゃあと殺すしか選択肢はなくなってしまう」
取り合えず兄ちゃんをカメハウスに運ぶか、兄ちゃんから感じていた禍々しい気はもう
消えているな。これなら飽きても暴れないだろう。
そんなことを思いながらオラ達はカメハウスの方に向かう、クリリン達が出迎えてくれて二階で兄ちゃんを休ませることになった。早く起きるといいんだけど……あれ頭潰れて死んでねぇよな？

悟空ｓｉｄｅ—ｆａｄｅｏｕｔ